

旧割元庄屋

美濃地屋敷



城館に入ることく、壮重で堅固な長屋門を潜ると、広い外庭が広がり、

正面には壮大な茅葺きの入母屋づくりの母屋がどしりと構える。

右手側は屋根を頂く土壁の塀で仕切られていて、

そこには庭が広がっているのだろうか、

松・楓の小枝が顔をのぞかす。

入口のまわりに配された格子、

透かし彫りは質素ながらも品格があり、風情を漂わせる。

そして大戸口を潜り、母屋の土間にはいると、

そこは…



開館時間

午前九時～午後四時

休館日

月曜日・祝日の翌日・
12月29日～2月末日までの間

住所

島根県益田市匹見町道川イ五〇番地

電話番号

(〇八五六) 五八〇二五〇

旧美濃地家について

長屋門
壮重で堅固なつくり

美濃地家は秦氏の出自といわれ、戦国期には尼子氏に仕え、その後美濃地村（現益田市西部）に移住して七尾城主益田兼堯に仕え、その任地の地名をもって姓とした。

近世の寛文年間（一六六一・七三）には、四代忠宗（代々彦左衛門と称す）が都茂銅山の支配人に命じられ、江戸時代中ごろには鉱山業で繁栄をなしていた益田表屋の藤井家と婚家関係を通して鑑（たたら）業に関係し、十代久忠の時に本地の道川に來地したと伝えられています。藤井家の経営する鑑業の支配人として尽力する一方で、村政を総括する庄屋を務め、江戸時代後期には数村を管理下におく割元庄屋（大庄屋）を度たび命じられるなど、被支配者層の頂点をきわめた家柄でした。

背後に山地を背負って構える屋敷構えは壮大で、ふるくは三方に水流の濠をもち、中央に母屋、表側には長屋門、そして勤場・牛舎・養蚕室・二階倉が建ち並び、側面は土壁で仕切られていました。附属建物としては背戸倉、米倉、味噌倉などもあって、通常の屋敷が四間取り系であるのに対して、当家は六間取り系で、代官などの支配階級者の接待のための座敷ノ間があることが特徴です。土間から見上げる力強い梁組は五段からなり、とくに牛引き梁は方三尺（約一m）もあって、これを支える大黒柱は方一尺一寸（約三〇cm）を測り、富裕な庄屋であった威厳さを今に伝えています。

安政二（一八五五）年に改修されて現在に至る当家は石見の庄屋建築史上からみて大変重要であり、また、庄屋史料ともいえる村況の明細帳、土地に関する検地帳・年貢免状などの多くの村方文書を遺していることも、学術上大変貴重なものです。とくに十五代記忠は、墨虎・墨湖と号して絵画に精通していたこともあって、秀れた掛軸・屏風などの書画が蔵されており、これらが米倉（上の倉）に、そして新築された民俗資料倉ではこの地方に伝わる民具を展示・公開しています。

米倉（上の倉）

鳳凰のこて絵が目をはひく米倉には、美濃地家に伝わる資料が展示されています

母屋

ぶ厚く葺かれた茅、瓦鉾（かわらしころ）、そして白壁に映える桁、束柱との調和が美しく、また、内部にも様ざまな趣向が凝らされ、往時をしるばせています

美濃地屋敷配置平面図

民俗資料倉

新築した民俗資料倉にはこの地域に伝わる民具を展示・公開しています

